

消えた雪山

清少納言のユーモア

2022/02/18



今日は名古屋にも雪が降りました。積もるほどではありませんが、周り一面、静かで美しい雪景色の朝を迎えました。

おおきな雪山を作る

長徳四年十二月中旬に、清少納言がいる京都に大雪が降りました。早速、中宮定子（ちゅうぐうていし または さだこ）は、宮中役人や庭を管理する役人たち総勢20名ほどの男たちを集めて、「大きな雪山を作れ」と命じました。完成した本格的な立派な雪山をみて中宮は女房たちに、「この雪山はいつまで消えないでしょう」と問うと、女房たちはこぞって、「年内には消えるでしょう」と答えました。清少納言だけは、「翌年の正月の中旬までは保（も）ちます」と答えました。中宮をはじめ女房たちは、清少納言に反対して、「年末まではもちませんよ」と言うのです。勝ち気な清少納言は、ただ一人、我を張ってゆずりません。

賭けに発展

さあ、雪山の賭けが始まりました。二十日頃に雨が降って、雪山は少し小さくなりました。清少納言は雪深い北陸の白山の観音様に向かって、「どうぞ、消えませんか」と祈りました。その功あってか、雪山は消えないまま年を越しました。

正月一日の夜には新雪が降り積もりました。「賭けの約束とは違うから」といって、中宮は、わざわざ新雪だけこそいで捨てさせました。

それでも、なかなか消えそうもない雪山でしたが、もう黒く汚れてみるカゲもありません。でも、少納言は賭けに勝ったと思いました。

とはいえ、心配になった少納言は、庭番を呼んで、「この雪山をしっかりと守って下さい。子供たちがこの上に登って遊んで蹴散らしたり壊したりしないように。十五日まで保てば、中宮さまよりご褒美がでます。私もお礼を差し上げます」といって、果物などをたくさん与えました。

賭けの決着の日は一月十五日でした。十四日の夜になって大雨が降り、雪山が消えるのではないかと清少納言は夜も寝ずにいます。その心配気な様子を女房たちは笑います。

清少納言は、翌朝早く、下人を無理やり起こして雪山の様子を見に行かせます。「まだ座布団の大きさほどに残っています。木守がしっかりと守っています」ということでした。清少納言はうれしくなって、明日の朝になったら、消え残っている雪のきれいな部分をとって盆に小さな雪山を作り、それに和歌を添えて定子にお目にかけてようと思います。

突然消えた雪山

賭の当日の早朝、清少納言は下人に命じて「筥」(はこ)を持たせて雪をとりに行かせます。しかし、下人は空の入れ物を手に提げて戻り、「雪はすっかり無くなっていました」というのです。「昨夜まで残っていたのに、そんなことがあるものかしら」と清少納言は納得できません。

「雪は残っていませんか？」という定子からの伝言には、「なくなりました。自分が賭けに勝つのを妬んだ誰かが取り棄ててしまったのです」と返事をしました。

その後、一月二十日に定子の御前に参上した清少納言はこのことをまず申し上げて、「せっかく素晴らしい歌を詠んでお目に掛けようと思っていましたのに」と残念がります。その姿を見て、定子は笑いながら、「私が、残った雪山を棄てさせたのです」といいました。驚く清少納言に向かって定子は、「お前が勝ったのも同然なのだから用意した歌を披露せよ」と言います。しかしとてもそんな気分になれません。結局、歌は啓上されませんでしたので、『枕草子』の本文にも見えていません。

なぜ、消えたのか？

でも、ここで、問題なのは、「なぜ、中宮が、意地悪をして雪を捨てさせたの

か？」という疑問です。その理由は、清少納言本人はなんの説明もしていません。

この話はとてもユーモラスで、私は大好きです。清少納言と雪と言えば、「香炉峰の雪」のことで、これは教科書にも載っています。でも、これは知識をひけらかすお話で、返って、清少納言が教養を自慢して威張っているようで本人のイメージを悪くします。ここでの「雪山の賭け」の話は、実は、清少納言本人がとても大事なことを言っているのです。ここからのことは、『枕草子』には記してありませんので、謎として残ったままです。

それは、「なぜ、中宮が意地悪をして残っていた雪を全部捨てさせ、清少納言に恥をかかせたのか？」という謎です。ここからは後代の国文学者たちの解釈によるのですが、「才気走った清少納言の宮中における評判がよくないので中宮がそれを心配して、わざと恥をかかせた」というのです。なるほど、それなら分かります。ユーモアもあって、貴賤上下の差はあれ、中宮と少納言との親しい女性同士の信頼関係もあって、とても心和(なご)む、いい話です。

実は激しい意地の張り合い

でも、本当にそうなのでしょうか？ どうもこの段は、そういった二人の仲の良い女性の親密な「美談」だけを語るものではなさそうです。少納言の書いた文面をよく読んでみると、どこか殺気だっています。この不穏なやりとりからも、少納言一人と中宮と女房たち連合軍との雪山をめぐる賭は、丁々発止のかなり熾烈なものであることがわかります。

雨が降ると少納言は白山の観音様にお祈りを捧げ、それを見た女房たちは嘲り笑います。今度は新雪が降ると、中宮がたちどころに「これは、あいなし。はじめの際をおきて、今のは掻き捨てよ」と厳しく命じます。少納言は少納言で、相手方のだれかが雪山を壊す恐れがあるので庭番にお礼を約束して警護に当たさせます。賭の当日の前夜に大雨が降りました。少納言は寝ないで心配します。その様子を女房たちはまた笑います。翌日、心配になった少納言は未だ寝ている下人を起こして雪山を見に行かせます。戻ってきた下人は、「まだ、明日や明後日は大丈夫です。お礼をください」と報告します。当日は、暗い内に起きて、下人に筥を持たせて雪をとりに行かせました。下人は、「雪は、なにも残っていませんでした」といって空の筥を持って帰ってきました。清少納言は、残った雪を筥に入れて、歌を添えて中宮さまにお贈りしようとしたのですが、雪が消えたのでそれが出来なくなりました。中宮は、「お前の勝ちだからその歌を披露しなさい」といいましたが、少納言は決して歌を見せませんでした。

そもそも、中宮がイカサマをやるなんて、なんともおかしい話です。中宮側も少納言も、どちらも、ムキになっていたことがわかります。お互いに、相手に負けたくないのです。女同士の思いやりや仲の良さなぞ、どこにも見えません。相手をやっつけたくて、手練手管(てれんでだ)を繰り出しての真剣勝負に見えます。雪合戦ならぬ、泥仕合です。

中宮は、清少納言より十才ほど若く一条天皇の皇后で、女性としては最高の地位にいました。一条天皇が、「心ばへのおとなおとなしうあはれなる方は誰

かまさらむ」(思慮分別があつてしみじみと情け深い点では、この方に勝る人はいるのだろうか)と褒め称えました。定子と清少納言では、身分でも人望でも全く勝負になりませんが、生活上のこういった身近な事件においてはお互いに意地を張り合う場面もあったのでしょう。この「雪山の段」はその意味でも、清少納言の気位と正直な対抗心がほの見える貴重です。

古文解釈の難しさ

でも、この逸話の本当の面白さは、中宮の意地悪とは別のところにあります。クライマックスは、下人が空の筥を持って戻ってくるところです。この箇所は、次のような文章になっています。

みなきえつとて ふたのかきり ひきさけて もてきたりつる ほうしの
ようにて すなはち まうてきたりつるが あさましかりしこと

この時代の仮名書きの約束として、濁音はなく、「がぎぐげご」や「ばびぶべぼ」は、「そのまま、「かきくけこ」と書き、「はひふへほ」と書きました。また、「ん」の字は「む」と書きました。

例えば、「なむしはけむしのたいしょうなり」という文章があつたとしても、これは、「菜虫は毛虫の大將なり」と読んでもかまいませんが、「なんじはげんじのたいしょうなり」(汝は源氏の大將なり)とも読めるわけです。

本文検討

この「雪山の段」は、『枕草子』の本文では、「三巻本」と「伝能因所持本」の二種類の写本にしか載っていません。それも、「伝能因所持本」は二種類あつて、結局、本文は三つに分かれます。

三巻本

身はなげつとて ふたのかぎり もてきたりけむほうしのやうに
すなわち もてきたりしが あさましかりしこと

伝能因所持本

第一類 (三条西本)

みなきこえつとて ふたのかぎり ひきさげてもてきたりつる
法師のやうにて 則まうてきたりしが あさましかりし事

第二類 (富岡本)

皆聞つとて ふたのかぎり ひきさげてもてきたりつる
ほうしのやうにて すなはち まうてきたりしがこと

この三つを比べてみると、肝心の文意の違いは、二箇所です。冒頭の「身はなげつとて」と「みなきこえつとて」との違い。もう一箇所は、「法師のように」と「ほうし(帽子)のように」です。これは、後代の、いえ、現代の国文学者のあいだでも解釈が分かれています。

通説に疑問

『枕草子』研究の第一人者、池田亀鑑先生の『古典学入門』（岩波文庫）によると —

この都分の解釈は、普通には、雪をとりに行った便が、「雪はみな消えてしまった」といって、筥(はこ)のふただけぶら下げて持ってきた、そのふたを帽子のようにかぶって、すぐ帰って来たのが心外だった—というふうになっている。

一説には、かぶったのはふたではなくて身だとしているが、どちらにしても、「みな消えつとて」を「もて来りつる」にかかる修飾節とし、「もてきたりつる」を主語節として、「あさましかりし」をその述語と見、かつ「ほうし」を「帽子」と解した点で共通している。

このような解釈は、はたして正しいであろうか。内容的にも、言語的にも、歴史的にも。

ある学者は、「身はなげつとて」は、「中身(残っていた雪)を外に捨てて」であり、「みなきこえつとて」は「(雪は)みな消えて」であり、どちらにしても、「雪をとりに行ったのですが、どこにも雪は消えてしまっていないので、筥の中身はありません」ということだと解釈します。

また、「法師のように」と「ほうしのように」について、ある学者は、「筥の中身の雪はなげて捨ててしまいましたので、中は空です」と空の筥を見せ、その筥の蓋をおどけて「帽子のように」被って見せたと解釈しました。

じつは、「この解釈は、二つとも間違いだ」と亀鑑先生はいうのです。

碩学の解釈

亀鑑先生によると、正解は、「身を投げつ」と「法師のように」だそうです。先生の趣旨(文意のみ)は次のようです —

そこで、三巻本によって、この部分の文意を通釈して見ると、「雪をとりに行った下人が、身は投げってしまったといって、(筥の)ふただけを持ってきた法師のようであったのは心外なことであった — ということになる。「身」とは、器物の「蓋」に対して物を入れる方をさす。その使いの者とは、おそらく「雪山童子」(せつせんどうじ:お釈迦さまの若いとき)の故事をふまえて、「雪山童子の身体と同じで筥の中身の雪は投げ捨ててしまった」と洒落をとばして空の筥をもってきたのだ。

池田亀鑑先生は、さらにつづけます(文意のみ) —

この雪山童子の故事は、当時では、知らない人はないほど有名な法話である。若き日の釈迦が「雪山」(ヒマラヤ)で修業中、「諸行無常、是生滅法」の「偈」(げ:仏の功德を讃える詩)の後半「生滅滅已、寂滅為楽」を知りたいために、餓えている「羅刹鬼」(らせつき)

に、自ら、身を投げて教えを乞うたという故事である。その故事をふまえて、清少納言が博学と即妙な機智を示したその法師の逸話というものがあつたものと見るべきである。この段の主題は明らかに「雪山」にある。清少納言が、「雪山作り」の事件からその「雪山法話」をもとにして、駄洒落をとばしたという下人を自分の想像力で作り上げたのだ。わざと、「筥の中の中身の雪は、雪山童子のように身をなげつ(捨てた)」と言いながら、下人が、「空の筥を手にもって、(雪山)法師のようにやってきた」と啓上したものだ。

なるほど、さすが、池田亀鑑先生です。碩学(せきがく：大学者)の国文学の大家です。難読の「身を投げつ」と「ほうし」の二つの言葉を、雪が溶けるように、見事に読み解いてみせました。

清少納言賛歌

この段も、文章の真意がわかると、清少納言がいかに才人であつたかもよく分かります。ユーモアもあつて、貴賤上下の差はあれ、中宮と少納言との親しい女性同士の生身のやりとりもあつて、とても現実感のある愉快的な「逸話」(anecdote : 秘話の意もふくむ)です。『枕草子』も、教科書に載っているガラス細工のような文章だけで分かつた気になって、真の随筆の面白さに気づかずにいるのは後世の人たちの傲慢(ごうまん)です。古いから、気まぐれな女性の書いたものだから、筆遊(すき)びの随筆だから、宮中の格式張つた世界での出来事だから、よくある季節の風景にすぎないから、自由に古今東西の本が読める図書館がないから、大学の国文科を出ていないから — などとつて、あなどつてはいけないことが分かります。『枕草子』は、いまさらながら、好奇心に溢れた、大変な労作であり、名作です。

でも、清少納言は、この『枕草子』を、一体だれに読ませようと思つたのでしょうか。

『枕草子』の最後の段(三百十九段)には、次のように書かれています。

この書物は、自分の目にうつり心に感じることを、よもや人が読む気づかいはないと思つて、所在ない里住みの間に書き集めたのを、あいにく、人のためには具合の悪い言い過ぎもしもそんな個所個所もあるので、よくよく隠しておいたつもりだつたのに、心ならずも世間にもれ出てしまつたことである。

この草紙は、「だれにも見せるつもりではなかつたが、どうしたことか人にみられてしまつた」といっていますが、その事情はよくわかりません。むろん、少納言が心なしか、読んで欲しかつた人とは、周りの貴族や女房たちではなく、自分と同じか、それ以上に教養あるあなたにです。

因みに、よく似た物語に、法隆寺にある玉虫厨子に描かれた「捨身飼虎図」があります。これは、「ジャータカ」という釈迦の前世のお話で、薩埵王子が飢えた虎の母子に自らの肉体を布施する様子が描かれています。

都築正道